

新約聖書の中の奥義 第11回

□この学び全体のアウトライン

第一部 イン트로ダクション

第二部 奥義としての神の国

第三部 教会に関する5つの奥義

第四部 イスラエルが頑なになることに関連する奥義

第五部 サタンの2つの奥義 と それを打ち破る神の8番目の奥義

□ 第三部「教会に関する5つの奥義」のアウトライン

A) 七つの星と七つの金の燭台の奥義

B) からだの奥義

C) 内住のメシアの奥義

D) メシアの花嫁としての教会 についての奥義

E) 信者の変換の奥義

D) メシアの花嫁としての教会 の奥義

エペソ 5 : 22~33

1. 5 : 22~24 妻たちに対する勧め：**服従の原則**

(1) エペソ 5 : 22 妻たちよ。主に従うように、自分の夫に従いなさい。

① 妻である女性信者たちは、主に従うのと同じように、自分の夫に従うよう勧められている。

② この勧めが意味するところ：妻である女性信者たちにとって、自分が主に服従していることを具体的に表すとすると、それは夫に服従することである。

(2) エペソ 5 : 23~24 キリストが教会のかしらであり、ご自分がそのからだの救い主であるように、夫は妻のかしらなのです。教会がキリストに従うように、妻もすべてのことにおいて夫に従いなさい。

【 】は言外に意図されている内容

節	メシアと教会の関係	夫と妻の関係
23	メシアは、教会のかしらである	夫は、妻のかしらである
23	メシアは、そのからだ（教会）の救い主である	【夫は、妻の救い主ではないけれど、妻を守るためなら進んで自らの生命も危険にさらす】
24	教会がメシアに従う	妻はすべてのことにおいて夫に従う

2. 5：25～27 夫たちに対する勧め：**愛の原則**

(1) エペソ 5：25 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を捧げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。

【 】は言外に意図されている内容

節	メシアと教会の関係	夫と妻の関係
25	メシアは、教会を愛する	夫は、妻を愛する
25	メシアは、教会のためにご自分を捧げられた	【夫は、妻を霊的に救うという意味では自分を捧げることはできないけれど、妻を愛する中で、妻を守るという意味で自分の身を妻にささげる】

(2) 夫が妻を愛するのは、妻が夫に従うよりも**先**である。

- ① 夫は、妻の服従を力づくで得ようとしてはならない。**夫は妻を愛することで、妻の服従を得なければならない。**
- ② そのことは、神の愛を見るとき、はっきりとわかる。神が私たちを愛してくださったのは、私たちが神を愛し、神に従うよりも先であった。
 - Iヨハネ 4：10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。
 - Iヨハネ 4：19 私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。
 - ロマ 5：8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。
 - ロマ 5：10 敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいた・・・

3. 5：26～27 メシアが教会のために、現在そして将来において、してくださること

(1) エペソ 5：26～27 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いををもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

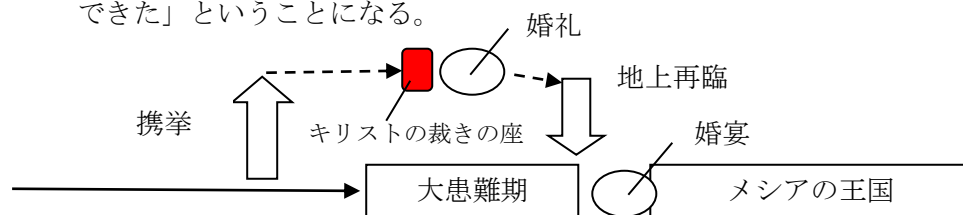
節	現在してくださること	将来してくださること
26	みことばにより、水の洗いををもって、教会をきよめて聖なるものとする	
27		ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせる

(2) II コリ 11:2 私はあなたがたを清純な処女として、一人の夫キリストに捧げるために婚約させた

- ① 現在、教会が水の洗い＝みことばによって聖化されているのは、将来、教会が清純な処女としてキリストに捧げられるためである。
- ② 教会の今の地位は、メシアと婚約している状態、すなわち花嫁である。

(3) 教会の地位が、花嫁から妻へと至る経緯

- ① 黙示録 19:6～8 は次のように記している。「ハレルヤ。私たちの神である主、全能者が王となられた。私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。子羊の婚礼の時が来て、花嫁は用意ができたのだから。花嫁は、輝きよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは聖徒たちの正しい行いである。」
- ② 子羊の婚礼の時、花嫁は輝きよい亜麻布をまとう。その衣は、聖徒たちの正しい行いを象徴する。
- ③ 花嫁をこのように完成させるのは、**教会の携挙**と**子羊の婚礼**との間で行われる「キリストのさばきの座」(II コリ 5:10) である。
 - 教会の携挙は、大患難期の前に起きる。
 - 子羊の婚礼は、大患難期の間に行われる。大患難期の末には、教会の信者たちは、キリストの地上再臨のときに地上に帰る。そして、メシアの王国がスタートする直前に、子羊の婚宴(披露宴)が盛大に祝われる。披露宴の客人は、旧約時代の聖徒たちと、携挙後に救われた聖徒たちである。
 - 教会の携挙と、子羊の婚礼との間で、花嫁をきよめるというステップがある。これが、「キリストのさばきの座」である。
 - このさばきは、個々人の信者にとっては「それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるため」＝報奨を受けるためである。信者の働きのうち、「木、草、藁」＝火で焼けて残らないものと、「金、銀、宝石」＝火を通過しても残るものとが識別され、火で残ったものについて、信者は報奨を受ける。報奨を受けない信者であっても、救いを失うことはない(I コリ 3:12～15)。
 - このさばきは、個々人の報奨のためだけではなく、同時に、花嫁である教会全体にとっても大きな意味がある。それは、子羊の婚礼を前にして、キリストのさばきの座の火を通してきよめられるからである。「木、草、藁」、すなわち正しくない行いはすべて焼き尽くされて残らない。そして、「金、銀、宝石」の正しい行いだけが残る。これにより、「花嫁は用意ができた」ということになる。



4. 5：28～30～32 再び夫たちへの勧め

- (1) エペソ 5：28～30 同様に夫たちも、自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する人は自分自身を愛しているのです。いまだかつて自分の身を憎んだ人はいません。むしろ、それを養い育てます。キリストも教会に対してそのようになさるのです。私たちはキリストのからだの部分だからです。

節	メシアと教会の関係	夫と妻の関係
28		夫は、妻を自分のからだのように愛する
29 30	メシアは、教会を愛し、養い育てる。 私たちはメシアのからだの部分だからである。	夫は、自分のからだの一部である妻を愛し、養い育てる。

- (2) メシアと教会の関係も、夫と妻の関係も、中心的要素は、愛と成長である。
- ① メシアはそのからだである教会を愛した。同じように夫は、自分のからだの一部である妻を愛さなければならない。
 - ② 妻は夫のからだの一部である。だれでも自分のからだは養い育てる。
 - 夫は、妻を成長させて完成させる責任がある。夫は、妻がそのスキルや資質を発展させる機会を与えなければならない。
 - 夫は、妻をやさしく愛さなければならない。夫は妻にやさしくし、愛し、いつくしみ、世話しなければならない。
 - ③ このような夫の責任を考えるとときに比較するのが、メシアと教会の関係である。メシアは教会に対して、やさしく愛し、建て上げてくださる。
 - ④ もし夫婦共に信者であるなら、なおさらである。夫も妻も共に、メシアのからだに属する。夫にとって、妻は、キリストのからだであると同時に自分のからだである。その妻を建て上げ、やさしく愛するべきである。
- (3) エペソ 5：31 それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」
- ① パウロがここで引用しているのは、創世記 2：24
 - ② 「それゆえ」・・・28～30 節で述べてきたことを受けている。夫にとって、妻を愛して、養い育てることは、自分のからだを愛することと同じである。このことが、「ふたりは一体となる」という意味となる。
- (4) エペソ 5：32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。
- ① パウロはここで、奥義を明らかにする。まず、この奥義は偉大であると宣言
 - ② **奥義の内容は、「キリストと教会を指して言っている」**
⇒ **教会はメシアの花嫁である**、これが奥義である

- 旧約聖書では、イスラエル民族は「ヤーウェの妻」として描かれた。このことは奥義ではない。
- メシアを信じる信者の集合体（＝教会）がメシアの花嫁であるということは、新約聖書において初めて明らかにされた。これは奥義である。

5. 5:33 結論 夫と妻への勧め

エペソ 5:33 それはそれとして、あなたがたもそれぞれ、【夫は】自分の妻を自分と同じように愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい。

E) 信者の変換の奥義

I コリ 15:50～58

1. 15:50 イントロダクション

I コリ 15:50 兄弟たち、私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

2. 15:51a 奥義の宣言

I コリ 15:51a 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。

- メシアの再臨や、死者の復活は、奥義ではない。それらは、旧約聖書で明らかにされていた。再臨についての預言は、むしろ旧約聖書の方が、新約聖書よりも詳細である。
- では、何が奥義なのか？

3. 15:51b～53 奥義の内容

(1) I コリ 15:51b 私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。

- ① 私たちは皆が眠るわけではない・・・信者たちが皆、死ぬわけではない
- ② 私たちは**変えられる**であろう・・・眠った者（死んだ者）も生きている者も皆、変えられる

(2) I コリ 15:52 **終わりのラッパ**とともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

- ① 「一瞬のうちに」・・・変換は瞬間的に起きる
- ② そのタイミングは、「終わりのラッパ」のとき
- ③ 終わりのラッパ・・・イスラエルの祭りの中の「ラッパの祭り」
 - 7つの祭り、春に4つ、秋に3つ。
 - 秋の祭りのうちの1番目、ラッパの祭りについては、旧約聖書では、その目的は不明。I コリ 15:52により、教会の携挙を予表することがわかった。

- 秋の祭り 2 番目は「贖いの日」、これは大患難期を予表する。
 - 秋の祭り 3 番目は「仮庵の祭り」、これはメシアの王国を予表する。
- ④ 携挙のときに死んでいた信者も、生きている信者も共に、朽ちない体になる。51 節 b 「みな変えられます」。これは広義、広い意味での「変換」である。死者も生きている者も、全く新しい別の体を受け取るのではなく、変えられた体となる。
- 死者の体は、土葬であれ、火葬であれ、物質界の中に形を変えて残っている。それらは神によって再びと集められ、朽ちない体に変えられる。
ルカ 21 : 18 「髪の毛一本も失われることはない」
- ⑤ 52 節では、死んでいた信者と生きている信者に関する表現を分けている
- 「死者は朽ちないものによみがえり」・・・復活
 - 「(生きている) 私たちは変えられる」・・・狭義の変換
- (3) I コリ 15 : 53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。
- ① これは、狭義の変換（死を経ない変換）の結果を教えている。
- ② 信者たちのうち、携挙のときに地上で生きている信者たちは、肉体の死を経ることなく、永遠の体を受ける。このことは旧約聖書のどこにも、明らかにされていなかった。この変換は奥義である
- ③ 変換の事例は、旧約聖書に 2 つある。エノク（創 5 : 24）とエリヤ（II 列 2 : 11）。しかし、二人の体が変わったということは、I コリにおいて初めて理解できる。そして、将来のある時点で、地上に残っている信者たち全員が死を経ないで変換されるということは、I コリにおいて初めて明らかにされた。

4. 15 : 54~58 死に対する最終的な勝利

53 節で変換の結果について教えられていた。「朽ちるものが、朽ちないものに変換される」、「死ぬべきものが、死なないものに変換される」。このことを受けて、54 節から 58 節において、死に対する最終的な勝利が宣言される。

I コリ 15 : 54~58

そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、このように記されたみことばが実現します。「死は勝利に呑み込まれた。」

「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、あまえのとげはどこにあるのか。」
死のとげは罪であり、罪の力は律法です。

しかし、神に感謝します。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあって、無駄でないことを知っているのですから。